

牛つなぎ石

松本城から南へ約 500 メートル、街角にしめ縄を付けた石がある。この石は「牛つなぎ石」と呼ばれているが、決して牛をつなぐために使われたものではない。その名は、二人の有名な武将にまつわる伝説に由来している。

1550 年、松本は甲斐の国（現在の山梨県）の武田信玄（1521-1573）に征服された。武田信玄は戦国時代（1467-1568）の最も有名な武将の一人であった。信玄は越後国（現在の新潟県）を支配していた上杉謙信（1530-1578）と対立することになる。この二人は「甲斐の虎」「越後の龍」と呼ばれ、激しい対立を繰り広げた。その後、数十年にわたり、両者は何度も戦火を交えたが、いずれも勝利することはなかった。信玄と謙信は長い戦いの中でお互いを深く尊敬し、信玄の死には謙信が涙したとも言われている。

1560 年代、信玄は南方の 2 つの国とも戦っていた。これらの敵は、信玄の内陸領と海岸を結ぶ通商路を遮断するために共同して戦った。当時、塩と魚介類は穀物を中心とした農民の食生活に欠かせないものであり、これを絶つことは信玄の勢力を弱めるのに有効な手段であった。塩が手に入らなくなった信玄の民は栄養失調に陥った。弱った敵につけ込むこともできたが、謙信は松本に塩を積んだ牛車を送ったという。その牛車は、現在この岩のある路傍の神社につながれ、謙信の贈り物は、ここに出現した町の塩市の起源となったとされている。

実は、この伝説が生まれたのは江戸時代（1603～1867）の終わり頃で、塩市はそれ以前から存在していた。しかし、両武将が互いに尊敬し合っていたことを示す物語として繰り返し語られ、現在でも「敵に塩を贈る」という表現が使われている。